

1997.7

各位

森岳まちづくりの会
代表 村本雅一

《参考資料配布》

「地方財務」平成9年7月号（ぎょうせい／A5判 288頁）巻頭グラビアおよび本文

◎亀地宏のまちづくり紀行

長崎県島原市／湧水の幟（ゆうすいののぼり）

——湧き出る水が苦海を流し 想いは高く普賢を越える

先頃あの亀地宏氏が、取材に見えたわけですが、その記事が載ってますので参考にしてください。

ご存じのとおり、亀地宏氏は、私たちの会の発足当時から勉強会のテキストに選んだ参考書の1冊「まちづくり交響曲」の著者であります。これらのテキストからも、先進地の多くの事例を学ばせて頂いたわけでありますが、まさか私たちの「まちづくり」が、その事例の一つに取り上げられるようになるとは思っていませんでした。

しかも、その取材に見えたのが私たちが師と仰いでいた亀地宏氏であったことは大変嬉しく光栄な事でした。その訪問に対して、取材に応じることにこっつけて、亀地氏を取り囲みいろんな話を伺ったことはいうまでもありません。

森岳まちづくりの会事務局／安藤直樹 0957-62-2912

広報／松坂昌應 0957-62-4414

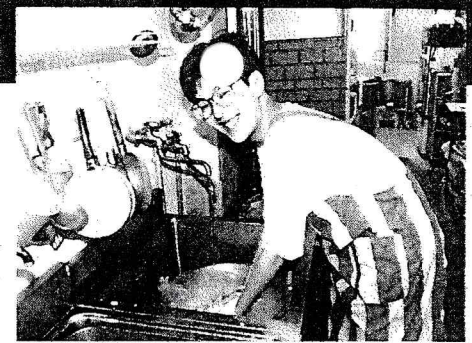
亀地 宏の まちづくり紀行

STAGE 88 長崎県島原市 湧水の幟

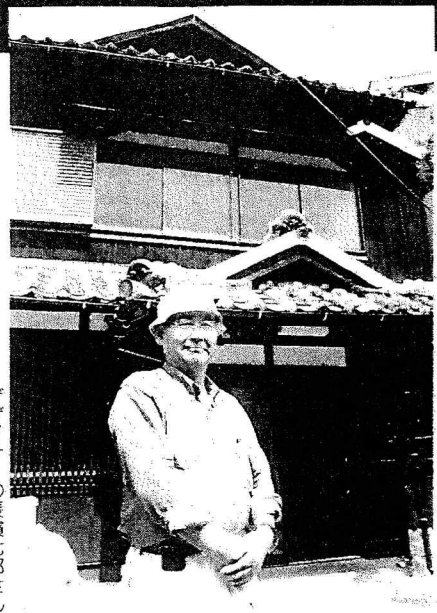
雲仙普賢岳の噴火によって大きな被害を受けた長崎県島原市で、かつては栄えていたものの、いつか落ち込み、さびれた森岳商店街を再生しようと後継者の若者たちが動き始めた。それはやがて商店街のワクを越え、まちづくりに広がったが、若者たちが行動を起こしたのは火山灰が降り、人びとが火砕流や土石流の恐怖におびえていたときだった。



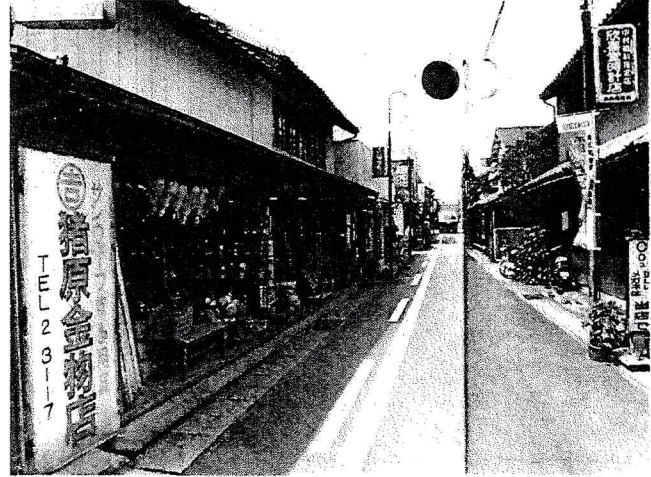
土石流に埋まった民家（深江町）



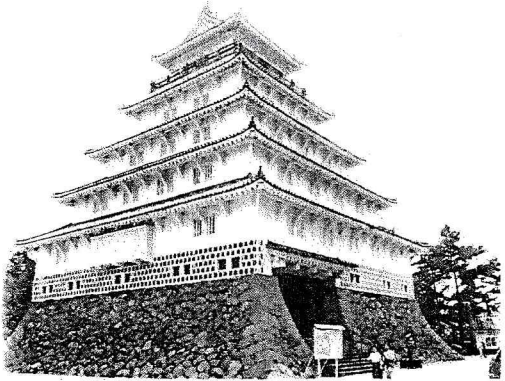
次期代表候補の村田真樹子さん



デザイナーの長濱七郎さん



森岳商店街



島原城



さらく探偵団の野澤正雄さん



森岳まちづくりの会の中核スタッフ。前列左から安藤直樹、村本雅一、猪原信明さん。後列左から光永建一、松坂昌應、谷口喜八郎さん



しまばら水屋敷の石川俊男さん

商店街青年部から「森岳まちづくりの会」へと進むなかで、若者たちは青空文化祭や観光土産のイラストマップの制作、島原城に武者のぼりやコイのぼりを上げるなど活動を積み重ねた。また、マップを販売したときは、利益を個人にも還元するという、いかにも商人らしい工夫もみせた。

亀地宏の まちづくり紀行

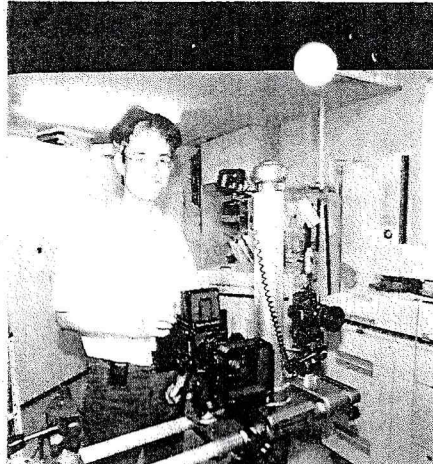
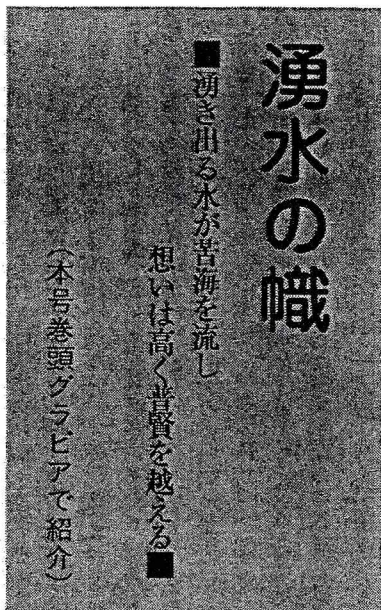


STAGE 88

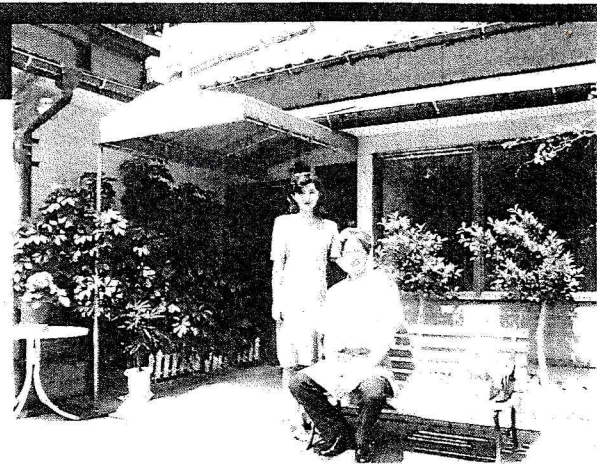
長崎県島原市

▽島原城は森岳城

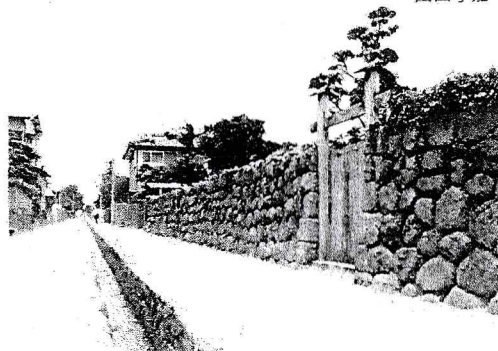
長崎県島原市の森岳商店街は正面にのぞむ島原城をかつては森岳城と呼んだくらいで、市内はもろん島原半島で最も栄え、にぎわったところだったが、いつかさびれて、人通りが少なくなった。そういうなかで商店の若手の後継者たちが集まって語り合い、勉強をしながら再生に向けて動き出し、商店街青年部から「森岳まちづくりの会」へと輪を広げたが、



写真館の松坂昌彦さん



山口孝嘉・梅沢清美さん夫妻 (PASTORALEで)



武家屋敷跡

消防署員の谷口喜八郎さん



宮崎酒店の宮崎敏明さん

猪原信明・美代子さん夫妻

若者たちの活動は確実にまわりの人の意識を変え、町のたたずまいにも影響を及ぼした。年功などにはとられないこの会では、平成8年に最年少の会員が代表に就任し、次は女性が有力な候補になっているという。

取材・文／亀地 宏
撮影／針生 克
レイアウト／加藤 敏

実は若者たちのこの活動は平成二年に雲仙普賢岳が百九十八年ぶりに噴火をし、その後、火山灰が降り、火砕流と土石流が繰り返して押し寄せる惨事のなかで始まったものだった。

島原市の中心商店街は昭和五十年ごろを境に島原鉄道の島原駅から市役所前の大手広場にかけての森岳地区を離れて、南側の万町、一番町などに移った。大型店の出店に加えて車社会が進行し、人びとが鉄道よりも市南部の島原外港を発着するフェリーを利用するようになったのと、古くからの森岳地区は道路もせまく、住居混在型のうえ、日本家屋の町並みなのでアーケードをつけたり、カラー舗装にするなどの近代化がむずかしく、後れをとったことが響いた。

にもかかわらず商店街としてまとまって打開に向けて立ち上がろうとは、みんなはなかなかしなかった。商店街の会長で文具・事務機などを扱う光永商店の光永建一さんが時折、若い人たちを誘っては「このままではダメだから、みんな力を合わせてがんばろう」とはげましたり、よそからだれかが帰ってくると歓迎会を催して、「青年部をつくろう」と呼びかけたりしてきたものの、そのときは「わかりました。やりましょう」ということになっても、結局はそれまでで、いつも中途半端のままで終わった。

そういうよんだ空気は少し動いて、なんとかかしようという雰囲気生まれたのは、平成三年春ごろになって、光永さろうと、毎月三日に例会を開くことになった。これは三日坊主にならないように肝に命じようという意味で、したがって、一回目の例会は六月三日に開催することが決まった。

▽初会合の日に火砕流

ところが、思いがけないことが起きた。開会を数時間後に控えた三日夕刻、前年の十一月十七日に噴火、三年にはいっても活発な活動を続けていた雲仙普賢岳から大量の火砕流が発生し、隣の深江町との境界となる水無川沿いに猛烈なスピードでふもとを直撃、市の南部の北上木場、南上木場、白谷町などをあっという間にのみ込んだ。

この火砕流で北上木場町一帯はほとんどの民家が全焼し、住民や警戒にあたっていた消防団員、警察官、報道陣など四十三人が死亡、寛政四年（一七九二年）の島原大変以来の惨事となった。島原大変はこの年四月一日夜、城下町の背後の眉山が崩壊し、大量の土石流がふもとの民家や田畑を襲い、有明海にだれ込んで津波を誘発、対岸の肥後と天草にも被害を与え、一万五千人の死者を出し、「島原大変肥後迷惑」といわれたもの。六月三日の災害はそれ以来のこととあって、森岳商店街は直接の被害はなかったものの、消防団にはいついて呼び出しを受けた人もたくさんいて、青年部の例会ど

んの度重なる働きかけに金物店の猪原信明さんや写真館の松坂昌應さんたちが応えようとしてからだだった。それも、たまにたま猪原さんが参加をした商店街づくりのセミナーで、ほかどこでも後継者不足に悩んでいるのに、森岳地区は五十五軒の商店のうち半数は後継者がきちんといて、それはきわめて珍しいことに気づいて、松坂さんに伝えたことが契機となった。

猪原さんと松坂さんは昭和二十九年生まれの同級生で、二人とも進学などで一度は地元を離れたが、猪原さんは五十三年、松坂さんは六十一年に故郷に戻って家業を継いだ。二人は同年だけに話が合い、それだけ後継者がいるというのに、お互いに顔も知らない、ことばも交わさないというのは、商店街が活力をとり戻せるわけがない。一度、集まってみてはどうかということ、平成三年五月になって、とりあえず十数人の若手後継者に呼びかけて話し合い、光永さんのかねてからの提案を受け入れる形で商店街の青年部を発足させることになった。

松坂さんはその際、以前はなにを言っても話しても、その場かぎりで終わっていたので、これからは発言したらそれを忘れず、責任を持つと言っていて、一人ひとりがこうしたらいい、ああすべきだと話したことを、すべてメモにし、コピーをしてみんなに配った。また、月に一度は日時を決めて集ま

ころではなくなった。松坂さんは会場に予定していた森岳公民館の入り口に「本日の例会は中止」と書いた紙をはった。

噴火はその後も断続的に起こり、火砕流や土石流が再三にわたってふもとを襲った。森岳商店街など市の中心部は眉山が普賢岳との間をさえ切る形になったため、それらの被害を受けることはなかったが、しかし、小さな石はとんできたし、たくさん灰がしばしば降り、子どもたちはヘルメットを必ずかぶって登校した。本当に悪夢のような毎日、市民は逃げ出し、買いたたけられたから、ただでさえさびれた商店街の売り上げは大幅に落ち込んだ。

ただ、災害に伴う特需のようなものは生じた。猪原さんの金物店では土のう袋やシャベル、ホースがよく売れた。松坂さんの写真館ではフィルムと現像、焼き付けの需要がふえた。土木工事の関係者による現場の写真撮影に加えて噴火のようすや火砕流、土石流を写そうとする素人のカメラマンがはいり込んできたため、松坂さんも七月には短時間で仕上げのできるミニラボを新たに導入、一時は毎日、午前二時、三時まで仕事をしたが、半面、市民はみんな浮き足立ち、戦戦恐恐としていたから、写真館にとっては利益率の高い婚礼や七五三などお祝いの写真の注文はなくなった。

噴火のあと、島原市には全国からたくさんの人たちがカンパや見舞い、救援物資を送ったが、ときには好意が仇に変わ

りかねないこともあった。松坂さんがフィルムを仕入れていた問屋が市に大量のフィルムを寄付しようとしたこともそうだったが、問屋にすると松坂さんの顔を立たつつもりでも、写真館はそれによってフィルムの売り上げが減るからむしろ迷惑。松坂さんもこのときは困って、とにかく頼んでフィルムの寄贈は止めてもらった。

いずれにしても六月三日の火砕流の発生からしばらくは、だれもがみな悪戦苦闘の連続で、自分のことを考えるのに一杯、他人のことや商店街のことを顧みるゆとりはほとんどなかった。しかし、時間がたつうちに、青年部づくりに動いた商店街の若者たちは少しずつ落ち着きをとり戻した。

「噴火は半年近くたってもおさまらず、長期化のようすを見せていました。そうなる私たちも腹がすわるといのか、居直るといのか、このなかでがんばるしかないかと考えるようになりまして。最初の例会を中止してから四、五月月たったあとの三年秋、改めて集まることになりました」。

死線乗り越えてきただけあって、みんなもこんどは真剣だった。例会は青年部発足にあたって決めた毎月三日の午後八時から。昔だと会合というたいい出てきたアルクールも抜いて、はじめから本音で意見を出し合った。ただ、あれほど打撃を受けて、苦しんだにもかかわらず、みんなは前途を決して悲観してはいなかった。

山活動は相変わらず活発で、溶岩塊が落ち、火砕流、土石流が何度も発生をするなかで三台の車に分乗して出発した。なにを聞くかも事前に十分議論をし、質問事項を箇条書きにして、前もって先方に郵送した。昔はなんのとりえもなかったひなびた小さな温泉地が、なぜ、脚光をあびるようになったのか、それがみんなの最も知りたい点だった。

湯布院町では「ゆふいん音楽祭」を手がけてきたリーダーの「はじめに想いありき」というひとことが心に残り、しばらくはみんなの合いことばのようになった。みんなはこれまでまちづくりはどちらかと言えば行政の仕事だと思っていたが、民間人でも何人かがんばって、そういう人たちの輪ができる町が変わり、それが商売にも反映することを知った自分たちも努力をすれば、できるかもしれないという手ごたえは、勉強を続けようという想いにつながり、メンバー全員が毎月三千元ずつ積み立てて、毎年どこかに視察に行くことが決まった。

それと同時に青年部としてもとにかく活動をしてみることになり、この年の秋、「青空文化祭」に挑戦した。島原市の市民祭り「しまばら温泉不知火まつり」に合わせて十月十七日の土曜日を選び、猪原金物店が店舗の隣りに持っている百五十坪ほどの駐車場を会場にして開催した。もっとも、はじめは不知火まつりのパレードが通る裁判所の庭にしたいと思

「私たちは噴火はいずれおさまるから、そうなれば噴出した溶岩が形づくると溶岩ドームや火砕流、土石流の跡を見にくる人がふえるはずだと考えました。それらはおそろく、日本というより世界的な歴史遺産になるだろうし、それを見にきた人たちは森岳商店街のすぐそばの島原城や武家屋敷跡にも立ち寄るにちがいない。とすれば、そういう観光客を受け入れ、引き止めて、またきたいと思わせる商店街にしてはどうかと話が進んでいきました」。

地元では普賢岳の火山活動が七年五月に停止をしたあと、噴火五周年の十一月十七日には大手広場に水無川上流から三十トンの溶岩を運んで普賢岳平成溶岩として据えつけ、翌八年五月には噴火で出現した溶岩ドームを「平成新山」と名付けたほか、二階の窓まで土石流に埋まった隣りの深江町の民家が観光パンフレットに登場するなど噴火の傷跡、爪あとを島原観光の新しい柱にしたが、森岳商店街の若者たちは、まだ、惨事の最中から火山観光に目を向けていたわけである。ただ、そのことに具体的にとり組むには、もう少し勉強をしなくてはならなかった。

▽駐車場で青空文化祭

若者たちは四年五月、大分県湯布院町に視察に行った、火交渉したが、国の施設だからということで貸してもらえず、駐車場になった。担当者もできれば貸したいという素振りもみせたが、やはり、前例になるのを恐れて、踏み切れなかったようだった。

青空文化祭のテーマは「子供たちに伝えたい昔あそび」で、このときは竹を使って主に竹トンボや竹馬をつくって遊んでもらった。竹はメンバーが山に近づいてとってきたが、噴火はこのころも衰えを見せず、竹を切っているときに警戒にあたる自衛隊のアナウンスが聞こえてきたという。また、駐車場は島原城の外堀の石垣に沿ったところで、地下水が湧いているので、それでお茶やコーヒーをわかして味わってもらったり、ピヤガーデンや果物、野菜、古本、手づくり品などのたくさんの出店もそろえた。みんなが力を合わせてとり組んだ、これが最初の活動だったが、多くの人に喜んでもらい、満足感と充実感が広がった。青空文化祭はその後も毎年、続けて行うことになった。

二回目の視察は五年五月、熊本市の新都商店街を訪ねた。ここではリーダーから「俺たちはこの町で年寄りを殺す」ということを聞いてびびりしたが、それは年をとった人たちを病院や施設で死なせずに、町のなかでみんなに看取られながら天寿を全うしてもらおうという意味だとわかった。また、商店街にはお年寄りが休息できるバンコと呼ぶ縁台の並

んでいるのが目に止まり、いいことは真似をしようと帰ると早速、自分たちもたくさんバンコをつくって置いた。視察の翌日は熊本城に出かけたが、途中で「自分たちは慰安や観光ではなく、勉強にきたのではないか」と気がついて、見直し、聞き残したことがあるはずだと思ひ直して、商店街に引き返した。

新町商店街から学んでつくったバンコは、この年秋の二回目の青空文化祭で役に立った。二回目は紙ヒョーキを飛ばすことと青空ジャズコンサートをメインにしたが、不知火まつりのために徳島県から阿波踊りの一行がきてくれることになったので、無理に頼んで青空文化祭の会場でも踊ってもらった。しかし、順番は最後の方になったため、着いたときには踊り疲れてみんなヘトヘトになっていたため、まず、会場にバンコを並べて腰をかけて休んでもらった。

「ほかはどこでもお酒をどうぞとはすすめても、立ち放しで休ませてくれるところはない。男性はともかく女性たちは浴衣を着たままだ地面に座わるわけにもいかない。みんなの歓迎ぶりはわかるけれど、縁台を並べてまず座わって休めと言ってくれた森岳商店街の心づかいには本当にうれしかったととてもよろこんでもらいました。おなかもすいていたようなので、文化祭で売れ残った食べものなどで一息ついて、それから踊ってもらいましたが、ここでの踊りが一番よかったの

被害のようを図面に落とし、最後は地元出身のプロのイラストレーターに仕上げてもらった。一方、島原観光イラストマップは「うれしかったのっさ島原道中」として描き、マップはどちらも四年十一月末までにでき上がった。

みんなが地図をつくる場所は地元テレビ長崎（KTN）の三十分番組にもなった。KTNは青空文化祭が終わったあと、放映をしたので、もう一度、同じことができないかと言ってきたが、青年部では「準備に時間がかかることを考えると、それは無理だが、これからイラストマップをつくる」と伝えると興味を示し、そのようを撮影させてほしいと言ひ、制作中にしばしばきてはビデオにとった。みんなはテレビ局がくるという連絡がはいるとヒゲをそったり、服を変えた。KTNはこのマップづくりの一部始終を「いま若者たちは普賢を越えた」というタイトルで放映した。

イラストマップができるころ、ヒゲの市長として人気のあった鐘ヶ江管一さんが引退し、十二月十八日には新しい島原市長の吉岡庭二郎さんにバトンを渡した。みんなは引退前の市長に会ってマップを贈り、「住民もがんばっています」と話したところ、そのことも「引退するヒゲの市長へのプレゼント」としてマスコミの話題になった。

イラストマップはどちらも一枚五百円で発売した。それもふつうはこういうことをする場合、売り上げはすべて会には

ではないでしょうか。最後は地元の人もみんなはいつて総踊りになりました」。

同じ商店街に社屋を構える島原新聞の記者も感激して「かつて栄えた商店街の伝統がよみがえった」と好意的に記事を書いた。若者たちはそれを見て、青空文化祭が不知火まつりに勝ったと思った。

▽商人らしく個人に利益

一回目の青空文化祭が終わったあとで、青年部では観光土産用のイラストマップをこしらえて、販売することになった。それというのも文化祭はたくさんの人でにぎわったが、利益を出したわけではなく、それならなにか別のことをして、活動資金をねん出しようと考えたからだという。イラストマップは「寛政島原大変之図」の平成版と現在の島原の観光名所の案内図の二種類を制作することになった。

「寛政島原大変之図」の平成版は寛政四年の眉山の大崩壊のようが地図の形で残っているの、それをこんどの普賢岳の噴火に置きかえて、噴出した溶岩がどこに飛び散り、火砕流や土石流がどこまで及び、広がったかを「平成島原大変之図」として表そうとしたもので、島原図書館の松平文庫から古地図を借り出し、判読しながら、それに合わせて今回の

いり、個人のものにはまずならない。しかし、それではメンバーは労力を提供し、犠牲を払うだけなので長続きしないと考へて、青年部では個人にもうけてもらえる工夫をした。

「商店街がメンバーにどちらも一枚二百五十円で卸し、それを各自が定価の五百円で販売することにしました。原価は一枚二百円弱ですから、一枚売れるごとに商店街に五十円、個人に二百五十円はいるわけで、それならがんばって売ってみようという気持ちになります。自分たちが商人なので、こういう知恵が出てきたのだと思います」。

はじめマップは森岳商店街以外では買えないようにしようとしたが、発売してみると、まわりからの問い合わせもふえたので、ほかの地区に卸す場合は値段を三百五十円とした。また、マップは一枚ずつ紙製の筒に入れて販売するが、この筒は反物を巻くときに用いる軸。大量に安く手にはいるものとして考へて思いつき、メンバーの呉服店から分けてもらった。

マップは大変之図を五千枚、島原道中を三千枚印刷した。一人で四百枚から五百枚売った人もいて、商店街にも四十万円くらいの資金がたまり、小規模なイベントなら、いちいち協賛金を集めて回らなくてもなんとかなるので活動もしやすくなった。マップは在庫が残り少なくなったので、そろそろ増刷することも考へているという。

▽森岳まちづくりの会の誕生

青年部のマップづくりがテレビの番組になったことは若者たちに対する周囲の見方を大きく変えた。それまでは活動に奔走しても、家族からさえ「どこへ行くのか」、「ヒマがあるなら商売を」と言われたが、テレビのあとは「がんばっているんだね」とか「なかなかやるね」、「えらいね」というように評価が変わった。

マップづくりと並行して、大手広場の公衆トイレを市が改築することになったとき、みんながとった行動も、商店街青年部の存在を多くの人に改めて印象づける結果となった。若者たちは改築をするなら必ず水洗にして、城下町の広場らしく設計を和風にするよう市役所に出向いて求めたところ、トイレは翌五年三月、ほぼそのとおりにでき上がったからである。

「これは私たちの作戦、パフォーマンスのようなものです。トイレは多分、黙っていてもそうなったのではないかと思えます。ところが、私たちが市役所に行くときテレビ局もついてきて、こう話したと放映し、そのとおりにになると、まわりがこれは森岳商店街の青年部が言ったからだと思ひ込み、私たちの手柄のようになりました。」

そういう活動を重ねるなかで島原商工会議所から研修のた

声をかけてもらおうと「観光道案内」のステッカーをこしらえた。最初はカラーコピーで十枚ほどつくったところ、市役所の土工観光課から五年度分の予算が少しだが余っているの印刷できると言われたので刷ってもらった。ところが、青年部の原案はこの地方の方言で「どこゆくと」という呼びかけにしていたが、市役所は方言はわかりにくいと言って「どこ行くの」に変えてしまった。青年部ではそれでは島原らしさが出ないと思い、マップを売ってつくった自分たちの資金の一部で、「と」という文字のシールをつくり、「の」のうえにかぶせて用いるようになった。

そうするうちに、こんどは島原城にたくさんのコイのぼりを泳がせてはどうかというアイデアが浮上した。ただ、島原城は市の所有になっており、使うためには許可があるので、松坂さんたちが担当課長のところへ行くと、割合すんなりと「いいでしょう」と言ってもらった。ところが、そばで聞いていた課長補佐が口をはさんだ。

「補佐はお願いと云うのはそれだけなのか、場所を貸せばいいのかと聞きますから、それだけですと答えますと、カネがほしいのではないかと云います。私はカネは多少は商店街で持っていますし、コイのぼりは市民から募集して、それを上げると云いますと、そういうことかと言いながら、不思議そうな顔をしました。これまでにいろいろな団体が市にお願

めの予算があるので使ってみないかと言われ、東京から講師を呼んで話を聞いた。そこでは商店街というワクのなかに閉じ込められずに、一般の人も含めた地域ぐるみの活動をするようにという話を聞いて、新鮮なショックを受けた。熊本市の新町商店街の視察したのはそのあとで、したがって多くのお年寄りたち向けのパンコの意味もよくわかり、商店街づくりからまちづくりへとみんなの視界が広がった。

しかし、普賢岳の活動はいっこうに衰えを見せなかった。それどころか、はじめは水無川流域に集中していた火砕流と土石流が、平成五年になると、北側の中尾川にも及び、五月には南千本木町の民家の近くにまで達した。建設業を営む村本雅一さんは千本木町地区に避難勧告の出た二十一日夜、たまたま現場写真を撮るために外出、遠くから自宅近くに押し寄せる火砕流を目撃したが、シャッターを切りながら、「もしかしら家族はダメか、助からないかもしれない」と一度は覚悟をしたという。

このときは幸い火砕流は民家までは届かず、家族はみんな助かったが、自宅はその後、焼失した。さらに、火砕流は八月には市街地の中心部にまで流れ込み、島原市内で安全なところはなくなった。しかし、それでも森岳地区の若者たちは活動を止めようとはしなかった。

平成六年にはいってからは、市内を訪れた観光客に気軽に

に行っています、たいはい補助金をくれとか協賛をしろと言うものなので、私たちは変わっていると映ったようです。結局、市は自分の方から、せめてコイのぼりを上げるロープくらいは現物支給を言ってくれました。」

しかし、いよいよ許可の手続きをするようになって、少し困ったことが起きた。森岳商店街は営利団体なので、そこに貸すのは具合が悪いという市役所の判断で、みんなはそれなら別の組織をつくらねばいと考え、六年四月、「森岳まちづくりの会」が発足した。代表は猪原さんで、松坂さんは事務局長を引き受けることになった。

▽城にはためく武者のぼり

それに、このころになると、みんなの関心も商店街からまちづくりに向いていて、市の職員や地元の商店の後継者以外の人たちも仲間にはいり、二十人くらいのグループになっていた。ただ、会の名前は島原まちづくりの会とせず、「森岳」を使ったが、これはあくまでも地域に根ざした活動がしたこと、メンバーはみんな森岳を大事にしてくれていること、大きな組織にするよりも小さなままで、いろいろな団体、グループと連携、協調する方がいいだろうと思ったから、も

もちろん、島原城は森岳城という昔からの誇りもあった。

島原消防署につとめ、会では青空文化祭を担当する谷口喜八郎さんも青年部の活動が広がるなかで仲間にはいった一人だった。谷口さんは昭和四十三年にいったん航空自衛隊にはいり、三年間勤務をし、空士長まで進んで退職、故郷に戻って消防署員となったが、実は二年十一月十七日未明に普賢岳が噴火をしたとき、最初に一一九番の電話を受けたのも谷口さんだったという。

「かかってきたのは山火事ではないかという電話で、それが最初の通報でした。ただ、消防署からは前面に眉山があるのので普賢岳は見えず、確認はできませんでしたが、その後、数件の通報があり、そのなかに一人だけ、噴火ではないかと言ってきた人がいました。私は島原市は山すそですが、普賢岳そのものは同じ島原半島でも有明海とは反対の橋湾に面した小浜町にはいるので、向こうの消防署と連絡をとり合いました。」

谷口さんや市役所の職員も加わって、コイのぼりを上げる準備が始まった。ところが、そこでだれかがまた「コイのぼりを上げるのなら、いっしょに武者のぼりも立ててはどうか」と提案し、みんながそれに「よかねー」と言って賛成したので大変なことになった。

というのは武者のぼりを立てるのはたいがい男の子のいる家庭だが、猪原さんは女の子三人、松坂さんも女の子二人と

間近にわたって揺れる。特に武者のぼりには島原城の歴代城主の名前を記したのぼり二十三本もいっしょにひるがえるようになった。

しかし、足場システムなどはできたものの、穴を掘り、鉄製のワクを組み、のぼりをつけた杉の丸太を一本一本立てる作業は結構、体力がいるという。最近では会員以外にもボランティアで手伝ってくれる人もふえたので、作業の手順をきちんと書いた「のぼり手引書」もこしらえた。

また、のぼりを上げたあとには強風に対する備えと気配りが欠かせない。二回目の平成七年にテレビ長崎が取材にきて、ビデオにおさめて帰ったところ、その晩に四十数メートルの風が吹いて支柱が倒れたことがあった。そのときはテレビ局に連絡して、放映を止めてもらったが、四月から五月にかけては風の強い時期なので、注意をされていて、危いと思ったら、すぐにおろさなくてはならない。しかし、森岳まちづくりの会と多くの市民の協力で、武者のぼりとコイのぼりは島原市の初夏の風物詩として定着した。

▽テレビがテレビを追いかける

森岳まちづくりの会は「どこ行くと」という観光道案内のステッカーやイラストマップをつくったものの、よく考える

いうように、男の子を持つ会員が少なくて、のぼりの数がそろわない。しかも、のぼりを立てるには長さ八メートルから九メートルの杉の丸太の支柱もいるが、それも持っているところがない。みんなで相談をした結果、隣りの深江町の農家をたずねてのぼりと丸太を借りてくることになった。

「建設業の村本さんにダンブカーを出してもらって、集落の代表のところにもとめておいてある杉の丸太を四十本くらい借りてきました。丸太は秋になると横にして、稲を干すのに使うので、終わったあとは、また、ダンブに積んで返してきました。」

結局、この年は四十本の武者のぼりが立ち並び、百八十四のコイのぼりが風に舞った。武者のぼりは遠くからも見えるように城壁に沿って立て、コイのぼりは城壁と堀端の桜の木の間にもロープを張ってとりつけた。しかし、武者のぼりを一本ずつ倒れないように立てるのは大変な作業だったし、コイのぼりのロープをつなぐ桜の木もきちんと補強をしなくてはならなかった。

二年目以降はのぼりを寄贈する人もふえ、市もバックアップをしてくれて、杉の丸太やそれを支える足場システムも整ったので、深江町まで借りに行くことはなくなった。現在は武者のぼりが百五十本、城壁と堀端の間には十五本のロープに三百匹のコイのぼりがゴールデンウィークをはさんで二週

と、自分たちも島原市のことをそれほどよく知っているわけではなかった。むしろ、知らないところが多かった。それならみんなでも市内を歩いて、知らないことを知り、おもしろいところを見つけてはどうかという市の建設課に頼める野澤正雄さんの提案で六年九月、会のなかに「さらく探偵団」が発足した。「さらく」というのは「ぶらぶら歩く」という意味のこの地方の方言で、みんなは野澤さんが歩くときのヒントやポイントを記してつくった「さらくガイド」と「さらくメモ」を持って、実際に市内を歩いて回った。

歩いてみると、やはり、いろいろなものがみつかった。江戸丁の宮川銃砲店には維新の志士の吉田松蔭が訪れていたことがわかったり、森岳商店街の宮崎酒店の三十五坪ほどの焼酎の酒蔵は演奏会に使うそうだと話題になった。また、この酒店の煙突は「おどみや島原の」で始まる島原守歌の三番に出てくる「青煙突のバツタンフル」のモデルではないかという人もいた。そのほかたくさんさんの珍しいもの、奇妙なもの、不思議なものも見つかったので、探偵団ではこうした町並みは美術館と同じ、この町並みを美術館と見たてて客を迎えようとも話し合った。

さらに探偵団の活動は通称を「カポチャ」と言っている地元のカポチャテレビジョン島原が「島原ぶらりさる記」というタイトルで放映した。その後、以前に「いま若者たちは普

賢を越えた」を放映したKTNのディレクターが復興のようすを伝えたいと言って訪れ、探偵団とぶらりさる記に着目し、こんどは探偵団が町を歩き、それを「カボチャ」の女性ディレクターが追いかけているところをKTNが撮影し、放映することになった。

KTNの取材は六年十一月十九日。商店街の若夫婦ということで猪原さん夫妻が主人公となり、二人が歩くところを「カボチャ」のディレクターでアナウンサーもカメラマンもこなす佐藤栄里子さんが追ひ、それをさらにKTNのカメラが追いかける形で進行した。放映は十二月十一日で、「島原ングラファイター」亭主関白とカカア天下」という番組になった。「本人は亭主関白と思っているが、実際は尻にしかれてる」という意味だそうだが、いずれにしても猪原さん夫妻はこの番組に出たことで島原市では有名人になった。

平成七年夏、普賢岳噴火に伴う警戒区域にはいったために休業していた島原グランドホテルに六十人のアーティストが集結した。大分県湯布院町の由布院空想の森美術館の館長・高見乾司さんを総合プロデューサーとし、ホテル全体を使って創作活動しようという「95島原アートプロジェクト 復興にKISS」と名付けた試みで、約一カ月間、全員がホテルに泊まり込み、思い思いの素材や作品を持ち込んで、子どもといっしょに巨大な壁画を描いたり、客室内で絵や彫刻に

のなかで始まった若者たちの活動はここまで広がり、大きくなり、たぐさんの出会いとふれ合いをみんなで楽しむようになった。

▽水を楽しむしまばら水屋敷

森岳商店街とは大手広場をはさんで反対側のアーケードを持つ万町商店街に七年八月、「しまばら水屋敷」がオープンした。二百坪ほどの敷地のなかに地下水の湧き出る池を持つ古い屋敷を一般に開放、島原名物を味わえるようにし、表は招き猫を中心とした民芸品の売店にしたもので、呉服店を継ぐはずだった石川俊男さんがしるる両親を説き伏せて開業した。水屋敷というのは島原市は地下水が豊富なために、地面を掘るとどこからも水が出て、かえって困ることも多いので、従来は水びたしの屋敷というように、あまりいい意味では使わなかった。石川さんはそれを逆にキャッチフレーズにしてみようと思ったわけで、したがって、「しまばら水屋敷」として商標登録もきちんとした。

石川さんのしまばら水屋敷は明治五年に建った商人屋敷で一階が和風、二階が洋風という和洋混在の珍しいタイプ。祖母の代までは住んでいたが、その後は空き家のままで、呉服店を営む両親は屋敷をとり壊し、池を埋めて、駐車場にしよ

とり組んだ。この間のアーティストたちの活動は一般にも公開した。

アーティストたちは次の年も集まりたいと思ったようだが、ホテルは結局、再開できずに閉鎖をし、使えないことになったので、森岳まちづくりの会になにか対応ができないかという打診があった。会ではかねて着目していた宮崎酒店の酒蔵を候補にし、一周年の同窓会とフォーラムを提案したところ二十五人が集まった。

二十五人には松坂さんが「写るんです」を一個ずつ渡して、市内をどこでも自由に写してほしいと頼み、夕刻からの酒蔵でのフォーラムに間に合うように現像し、焼き付けた。たとえ「写るんです」を使っても、芸術家の作品は構図も目のつけどころもやはり違うと多くの人が感心した。

同窓会は猪原金物店の斜め向かいで、以前は歯科医が使っていたが、昭和三十年代に関西に移って以来ずっと空き家のままになっていた廃屋で行った。会員でインテリアデザイナ一の長濱二郎さんに少しきれいにしてもらい、使ったところ好評だった。

宮崎酒店の酒蔵を「演奏会に使っては」と考えたさらに探偵団のアイデアも最近になって実現した。九年一月にはここでジャズコンサートを開き、六月には酒蔵コンサート第二弾として「箏と尺八のセッション」を開催した。小さな商店街

りと話し合っていたという。石川さんは昭和三十九年生まれで、学校を出たあと大阪の呉服店で二年間修業をし、六十三年末に後を継ぐため帰郷した。

だが、石川さんも普賢岳噴火の被害を受けて苦しみ、悩んだ。島原大変と同じように眉山が崩れるといううわさを聞いたり、明日は死ぬかもしれないと本気で思ったこともあった。火山灰がはいってくるのを防ぐため、店のシャッターをおろす日が多くなり、たとえ開けても高級品は売れなくなった。「豊がなくならないかぎり呉服は売れる」と思っていた石川

さんも、やはり、相応に不安になった。

在庫はたくさん持っていたし、高級品も多かったから、諫早市内に支店を出すことも考えて、店舗も見つけたが、ギリギリのところでもとり止めた。出店すれば一千万円前後の借金をしなくてはならなかったし、それ以上にもう少しここががんばってみたいという想いの方が強かった。

そういうなかで森岳まちづくりの会をはじめとして市内の特に若い人たちが立ち上がるのが目にはいり、自分でもなにかできないものかと考え始め、やがて、それまで空き家になっていた水屋敷の活用に気持ちがあがった。石川さんは平成七年にはいったころ両親にそのことを相談したが、もちろん、最初は賛成してはもらえなかった。

「両親は私に呉服店を継がせるつもりでしたからウンとは

言わず、相当にモメました。しかし、私はなんとしてでもしてみたい。自分の力をためしたいと言ってがんばり、説得しました。両親は援助は絶対しないと云いましたが、私はそれがかまわない。自分でも中途半端にならないように呉服店を継ぐのは止め、七月五月末で退社の手続きをとりました。

屋敷は四月にはいつから開けた。普賢岳の活動はこのころようやくおさまったが、屋敷のなかには灰だらけ。それをまづとり除かなくてはならなかった。自分ですべて掃除をし、障子をはりかえ、傷んだところを修理した。二階の屋根は雨もりのする恐れがあったが、瓦をふきかえるゆとりはないので、ブルーシートを張ってしのいだ。

使ったのはそれまでに貯えておいた三百万円で、そのうち二百万円は台所の工事でなくなつた。七月末に保健所の許可をとり、オープンにこぎつけた。入場無料で自由にはいつて庭を回り、なかに上がって縁側や座敷から庭と池をながめてもらう。二階にのぼってもかまわない。にぎやかなアーケード街に面した格子戸を開けて、瓦をのせた門をくぐるととたんに広がる閑静な世界を十分に味わってほしいという。

提供する島原名物はかんざらしとそうめん、湧水による水だしコーヒーなど。かんざらしというのは白玉粉でつくった小さな団子を湧水で冷やし、蜂蜜と白砂糖でこしらえた独特の蜜をかけたもの。売店にはたくさんの招き猫が並んでいる

た。商店街に面してはいるものの、玄関もフロアも反対の裏側で、表からははいるところも見えなければ、だれがコーヒーを飲んでいるかもわからない。店主の山口孝嘉さんによると「この方が車の音も聞こえないし、外堀の石垣が見えるだけで落ち着く」そうだが、たしかに、せまいところだと、すぐに「だれとだれがいた」とわかったり、知っている人が通ると店内からでもあいさつをしたりしなければならぬので息が抜けない。「隠れ家のようなところで、ゆっくりできるのがいい」と言って訪ねてくる人が多い。

喫茶店は一軒の家を半分仕切ったようになっていて、表の通りに面したところは夫人の梅沢清美さんが以前から営んでいる「はるにれ」と名付けた洋品店。裏側だけが長いこと空いていたので、市内の別のところで喫茶店を開いていた山口さんが、火山灰が降るなかを移転して開業した。

二十五人のアーティストが同窓会を行った元歯科医院の廃屋は三味線などの和楽器店に生まれ変わることにした。長濱さんが改装を担当して、すでに仕上げの段階にはいつており、間もなく開店するという。森岳商店街はこれまで五十五軒だったが、一軒ふえることになった。

森岳まちづくりの会は平成八年の総会で、代表が猪原さんから自宅に向かって押し寄せる火砕流の写真をとった村本さんに、事務局長は松坂さんから猪原金物店と駐車場をはさん

が、石川さんは日本招き猫倶楽部のメンバーで、入会順の会員番号は五七八。現在ざっと七百人くらいがはいつていて、年に四回、会報も出しているという。

年間の売り上げ高はいまのところ一千万円。個人の所得は二百二十万円前後だが、奥さんに毎月十萬円の給料を渡しているのを加えると三百五十万円くらい。「普賢岳が噴火をしていなければ、私も呉服店を継いでいて、水屋敷に手を出してはいなかったと思う」と言う石川さんは「両親の呉服店は姉妹が三人いるから大丈夫。ここで失敗したら福岡へでもニューヨークへでも行って、呉服店には絶対に戻らない」とも言っているが、しかし、しまばら水屋敷はすでにこの新しい観光スポットとして評価も高まり、定着した。

▽最年少会員を代表に

森岳商店街もまちづくりの会の活動が広がるのに伴って次第に変わった。人びとの意識も変われば、たまたまも変化した。以前は洋風建築で、さらく探偵団のとき、みんなが業屋発祥の地と知ってびっくりした薬局が和風に改装したり、ふつうの民家でも白い壁の日本風に変えるところが出始めた。

青年部が青空文化祭の準備をしていた平成四年九月には喫茶店「PASTORALE(パストラール)」がオープンし

で隣り合う安藤電機店の安藤直樹さんに交替した。代表になった村本さんは昭和四十三年生まれで、この時点でメンバーのなかでは最も若く、それが選出のキメ手になった。森岳まちづくりの会は年功にとられないのが基本で、やる気のあつた人を立てることと、やはり、最年少を代表にすることで、会のイメージアップをねらったようなところもあった。

さらに、八年秋にはじめての女性の会員として村田真樹子さんが加わった。村田さんは森岳商店街の「めん処むら田」の看板娘。むら田の名物は島原の乱のとき天草四郎が兵糧にしたという言い伝えを持つ具雑煮で、餅のほかに鶏肉や凍り豆腐、ハクサイ、シイタケ、ゴボウなど海や山の材料を十種類以上入れるという。村田さんも会員になったことで、たくさんの自分とは違った人と出会い、話をしたり、聞いたりすることができるようになった。また、それによって自分の世界が一回りも二回りも広がった。

森岳まちづくりの会の役員の任期は二年。平成十年が改選期だが、村田さんは次期代表の有力候補。現代表の村本さんよりずっと若いし、しかも、唯一の女性会員。期待をしている人は多い。なお、雲仙普賢岳は平成七年には落ち着きととり戻し、島原市と深江町、長崎県の雲仙岳災害対策本部も八年六月三日に解散した。しかし、地元はいまも復旧、復興工事の真最中で、傷跡が消えたわけではない。